

Once upon a time in Utsunomiya

# 一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより 第29回

## 亀井の水と鏡が池

亀井の水の親子亀。  
大正期のものか



その昔、宇都宮には七木、七水、八河原と呼ばれる名所があった。江戸期の好事家が格付けしたものといわれ、城下の由緒ある名木や名水、田川の名勝が並んでいた。しかし、平成の今、その存在がおろかあった場所さえ分からないものも多く、また、口伝であることから異説もあり、すべてを特定することはできない。ここでは、明治年間の名蹟誌をもとに紹介する。

七木とは、塩竈の桜（二荒山神社）、普賢堂の桜（東勝寺）、薄墨の桜（下之宮）、城内の化桜（宇都宮城内中御門）、亀井の榎木（亀井の水畔）、大櫓（城内松が峯門）、大銀杏（城内百間堀と三の丸との境界）。七水とは、池の井（江野町）、東石町の井（石町）、亀井の水（下河原町）、明神の井（二荒山神社）、慈光寺の天女水（塙田）、馬場の井（馬場町）を指した。

八河原は、最上河原、下河原、中河原、北河原（興禪寺西側）、七里河原（今泉）、仙阿弥河原、生霊河原とあるが、その場所は定かでない。

この中で今も健在なのは、大銀杏と天女水。そして明神の井。亀井の水と滝の井は、湧き水こそ枯れたが宇都宮名所のひとつであることには今も同じ。石の親子亀が置かれた亀井の水には、次のような伝説が残る。

「宇都宮がまだ池辺郷と呼ばれていたころ、兄頼朝とのいさかいにより鎌倉から奥州平泉に落ちのびた義経を追って、静御前一行は旅を続けていた。しかし、宇都宮大明神（二荒山神社）を前に、静御前は疲れと喉の渇きから一歩も動けなくなつた。お供をしていた亀井六郎は一計を念じ、持っていた檜を地面に突き刺した。するとそこから水が湧き出し、静御前の喉を潤



パンパツ屋敷にあった鏡が池

すことができた。元氣を取り戻した一行は奥州に向かつて再び歩き出した。

静御前にまつわる伝説をもうひとつ。二荒山神社から南に下りラ・パーク南側に立つ「鏡が池の碑」がそれ。「神社に参詣する際、手を清めようと大きな池の畔に身がかがめたところ、懐にあった鏡がするりと深い池の中に落ちてしまった。拾おうにも拾えず、鏡は陽の光を受け池の底できらきらと光っていた」。

名所一つひとつに秘められた伝説もまた、宇都宮の歴史である。



現在の亀井の水。案内板が立つ